

第 19 回いけだ夢燈花 命のストーリー

6th September 2020



主 催：第 19 回いけだ夢燈花実行委員会
主催事務局：特定非営利活動法人北摂こども文化協会

命のストーリー 新井 冴さん

銀ちゃんとは、旅行先の沖縄で出会いました。首里城の周りを歩いていると、信号を渡ろうとしている白い雑種犬がいたので、「危ないよ。こっちにおいで」と呼びかけました。うつろな瞳をしながらもこちらに歩いてきたので、これは私が飼い主に責任を持って送り届けようと心に決めました。

近くの家いきいて飼い主を探しましたが、誰もこの犬を見た事がないというので捨て犬だとわかりました。獣医の診察を受けると、事故にあったことがあるのか背骨が曲がっていて、もともと心臓が悪い上にフィラリア持ちで、見た目は若いけれど歯を見るとそんなに若くはなさそうだとされました。白い毛は薄汚れて茶色になっていました。健康な子犬ならともかく、こんな状態の君を誰かに任せることなんてできないと思い、ペットの飼えるマンションを探して自分で飼うことにしました。

最初はリードをつけての散歩に慣れていないせいかふらふら歩かし、ドッグフードを食べないので缶詰ばかりあげていました。ほかの犬を見ると狂ったように吠えたり、手を上げるとビクッと体をすくめるのを見るたび、今までどんな目にあってきたんだろう、苦労したぶん幸せになってほしいと思いました。

たくさん散歩もしたし、車に乗せてどこへ行く時も連れて行きました。犬についての本もたくさん読みました。出会った時には虚ろだった瞳が、だんだんキラキラしてきて、とびきりかわいくなりました。

出会ってから5年くらいたったころ、急に衰えてきて、とうとう徘徊するようになりました。それから3日後、朝起きたら枕元で冷たくなっていました。

精一杯愛したので不思議とそれほど悲しくはなかったです。君を幸せにできたと自信をもって言えます。私は君を助けたけれど、君を可愛がることで私の方こそ成長させてもらえました。私のところへ来てくれてありがとう。

命のストーリー

池田市在住 20代後半・女性 匿名

2月14日午前3時17分、バレンタインデーに3896gで君は生まれてきてくれました。その瞬間を迎えるまで40週と2日間を私のお腹に居てくれたことを覚えていますか？

君は私のことを思ってくれてか、つわり症状はほとんど無く、そのかわりに元気だよと言わんばかりに手足を動かしてお腹の内側からキックやパンチをたくさんされました。

妊娠期間中は食中毒や食あたりを避けるために私は好物のローストビーフや生ものお寿司を我慢しました。むくみがあっても大丈夫なように寂しくはあったけれど結婚指輪を外してネックレスにしてみたり。

その当時住んでいた三重県から里帰り出産する大阪までの道のりの車の中で旦那と名前について思案したり、エコーで見たおててが嬉しくて何回もその動画を見たり。

君のおかげで色々なことを知り、命の大切さを身に浸みて感じれた。

そんな中、血の検査で引っかかって詳細を調べに大きな病院へ。もし、君に会えなかったらどうしよう。そう思うと不安になってお医者さんの前で泣いてしまい、ナースさんを困惑させてしまったことがありました。

結果、子宮けい部の細胞に異変があるのがわかりました。それは出産後に手術が必要なものでした。ただ、治る段階でそこまで深刻

でなかった。それどころか、早期に発見できたので幸運だった。

ここからは君が産まれてこようとしたお話をするね。

2月7日、君が産まれてくる7日前。大波小波の不規則な陣痛がやってきました。しかし、大きな陣痛にいたらずとうとう14日に。始めの頃は統合失調症という精神の病気持ちの私を案じて旦那は促進剤での出産を望んでいましたが、先生の判断もあり、自然分娩での出産を経験することになるのです。

分娩室で頭からして大きかった君は、助産師さんも取り上げてくれた開ロ一番に「重いね～」と言っていたよ。

時は過ぎて、育児を初めて1年と半年が過ぎました。育児は今までの人生で経験してきたことのベストを尽くしていても大変です。

イライラだったり不満だったりの原因はだいたい君からです。

でも、その何倍ものうれしさをくれるのも君なんですよ。それから、君や私はパパが仕事をしてお金を稼いできてくれてくらせているんだよ。

だからこそ、わたしはがんばれる。そして、これからもすてきな家族にしていこうね。

命のストーリー 池田市在住 30代女性 匿名

MISIAの「逢いたくていま」を聞くと、たちまち2015年の10月16日にタイムスリップした様な気持ちになります。その日は64歳で亡くなった父の命日にあたります。余命宣告では持ってあと一年と言われ、12月の自身の誕生日を待つことなく宣告通りほぼ一年で旅立っていきました。ステージ4の大腸がんでした。私は余命宣告の時には家庭と仕事の両立で悩み新卒で入った仕事を辞めることを決めた時、父が亡くなった当時は32歳、第三子を8月に出産したばかりで慌ただしい日々を駆け抜けていた時でした。

歌は父の葬儀の帰り道、車に揺られながらラジオから流れてきました。車窓から眺める空はどこまでも果てしなく続くような雲一つない空で、10月とは思えない程とても穏やかで温かい日差しの日でした。その穏やかな空が父の人柄そのものの様に見え、父が本当に空へと旅立っていったんだなと感じ、もう言葉を交わすことは二度とないんだと思うと拭う暇がない程頬を何度も涙が伝っていきました。

父が亡くなってからは月並みですがもっと親孝行をしておけば良かった、もっと入院中の面会に行っておけば良かった、等と自責の念に駆られていました。そんな沈んだ気持ちの日々を過ごしていた時に4歳の長女の夜泣きが始まりました。

そんな夜に長女を抱きしめているとふと、「ママもじいじみたいに死んじゃうの？」と言われました。私は、長女はまだ4歳なのに人は必ず死んでしまうことを理解して、私を失う悲しさで泣いていたんだと初めて気づきとても驚きました。この時やっと私は子供たちにとっての自分の存在の大きさを実感し、今目の前にある小さな命を育むことに真摯に向き合わなくては、と目が覚めました。それから私は「そうだよ、いつかは必ずね。でもあなたが、ママがいなくても生きていけるくらいうんと大人になってからだよ。それまではあなたに、もう一人で大丈夫だよって言われるまでずっとそばにいるよ。」と答えました。その日から夜泣きは止みました。

これから先楽しいことばかりの道のりではないだろうけれど、子供たちに産まれてきて良かった、と思ってもらえるよう精一杯育てていこう、と思えた出来事でした。いずれ自分たちの人生を自分の力で生ききる子に育てて欲しいと願っています。お父さん、どうぞ空から私たちを見守っていてください。